

久米塚古墳

発掘調査概要報告書

1996. 3

観音寺市教育委員会

正 誤 表

正

2 1 頁 2 行

・ ・ 然レトモ此塚ノ ・ ・

2 1 頁 11行

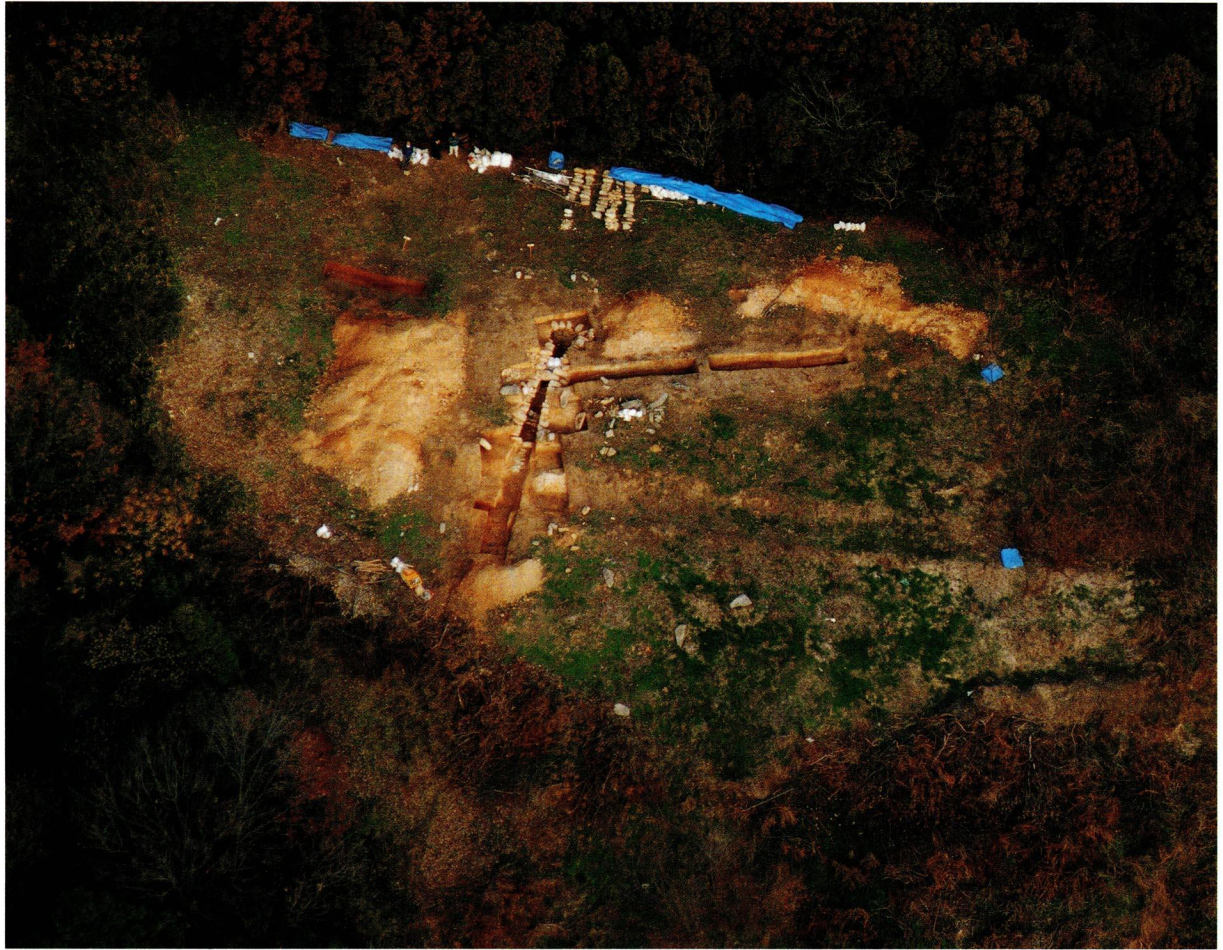
・ ・ ト子想ハ既ニ ・ ・ ・

誤

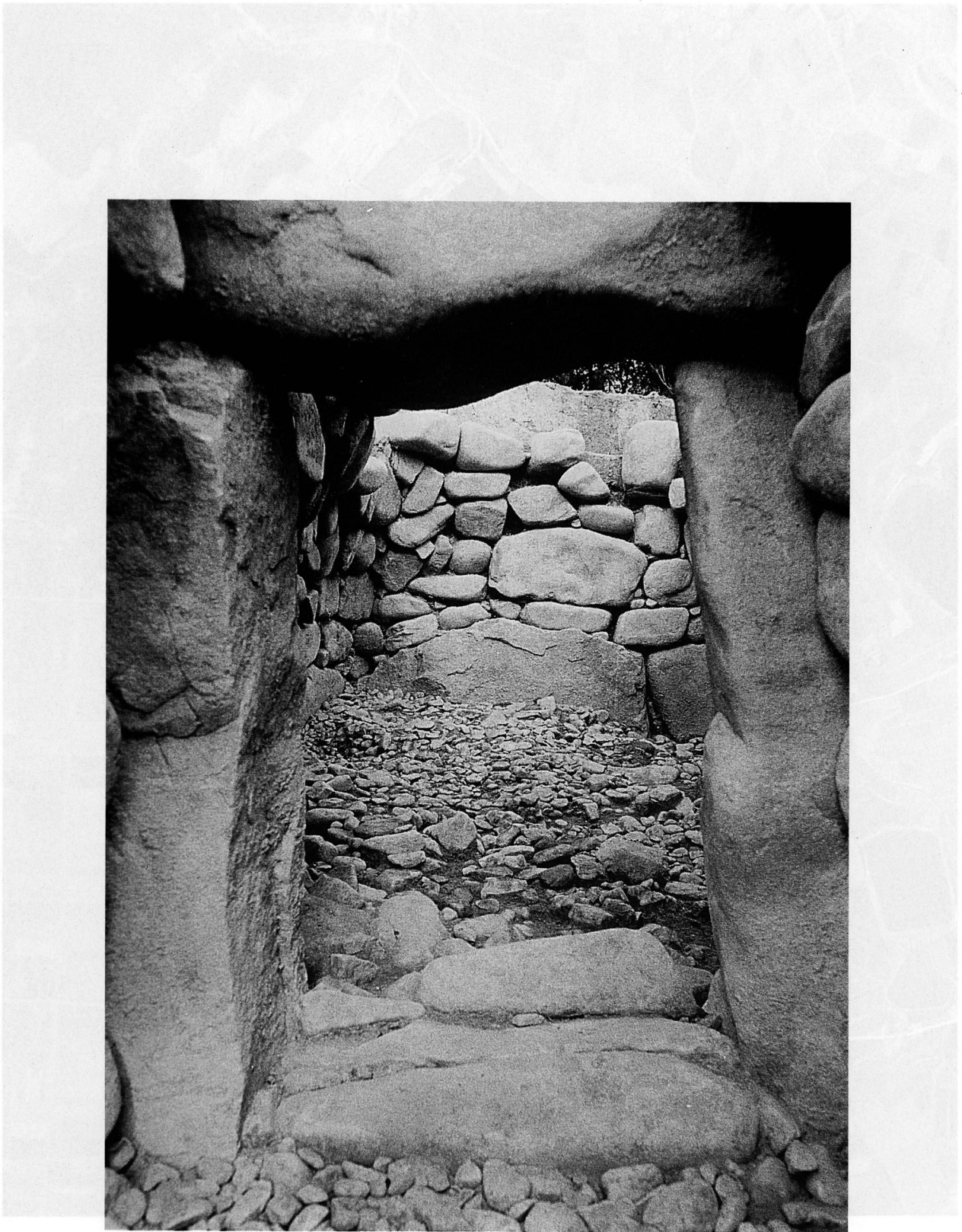
・ ・ 然レトモ氏此塚ノ ・ ・

・ ・ ト子想ハ既ニ ・ ・ ・

八木隆太郎



航空写真 (山崎写真館提供)



久米塚古墳（玄門石付近より奥壁を望む）



母神(羽上)山全景 (航空写真 - 昭和30年代)

例 言

1. 本書は、観音寺市教育委員会が平成7年度の観音寺市埋蔵文化財発掘調査事業として実施した発掘調査の概要報告書である。
2. 本事業は、観音寺市粟井町字母神705番地1に所在する久米塚古墳において平成7年（1995）10月23日から平成8年（1996）2月2日まで実施された。
3. 本書の編集作成は観音寺市教育委員会 社会教育課 文化振興係 主事 久保田昇三が行った。
4. 本事業の中で、実施された墳丘及び周辺部の測量調査及び遺物の実測は久保田が行った。
5. 本事業の実施にあたっては、土地所有者の西山久司郎氏をはじめ、発掘作業に携わった松本光男氏、西山秋久氏、坂田 昇氏、高橋利明氏のご協力を頂いた。記して謝意を表します。

目 次

巻頭グラビア・例言・目次

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 立地と環境	1
母神山古墳群分布図	2
3. 調査概要	3
久米塚古墳の地形測量図・トレンチ配置図	5
トレンチ1土層断面略図	6
石室全体実測図	7
出土遺物実測図	8
4. まとめ	9
5. 写真	10
6. 参考資料	20

1. 調査に至る経緯と経過

明治38年1月、香川県師範学校の教諭である荻田元広氏が、同氏の義父であり粟井村長、三豊郡会議員、香川県会議員を歴任された高城亀太郎氏の援助で、続けて4基の古墳の発掘調査を実施している。まず、粟井村藤目城山古墳、つづいて、同村母神山の真鍋塚（仮称）、久米塚（仮称）、久保田塚の順である。

その当時の様子は、財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵の荻田氏著の『讃岐史料雑之一』に記録されている。なかでも、今回発掘調査を行った久米塚については、特に詳細なスケッチ、略測図等が残されている。

記録によれば、同氏が発掘調査を行うまでは未掘の状態であつたらしく、天井石の隙間から蠟燭を中に下ろすと大小の土器が右往左往に散乱しており長刀が静かに横たわっていたとの記述がある。（詳細は本書後段の参考資料を参照のこと）なお、調査後の出土品については、同氏と地主との間で等分され、さらに、同氏分の半分は一ノ谷小学校（戦後火災消失）、半分は鎌田共済会郷土博物館に寄贈されたようである。（瀬戸内海歴史民俗資料館研究紀要第6号より）

昭和30年代に樹園地等の開墾により再び古墳の存在と遺物が確認されたが、それまでの間はその存在のみ知られていたにすぎず（例えば、大正10年の香川県三豊郡史に久米塚の記載がある。）、詳しい調査が実施されず築造年代、墳丘規模、墳形、埋葬施設の構築状況等不明なまま今日まで至った。

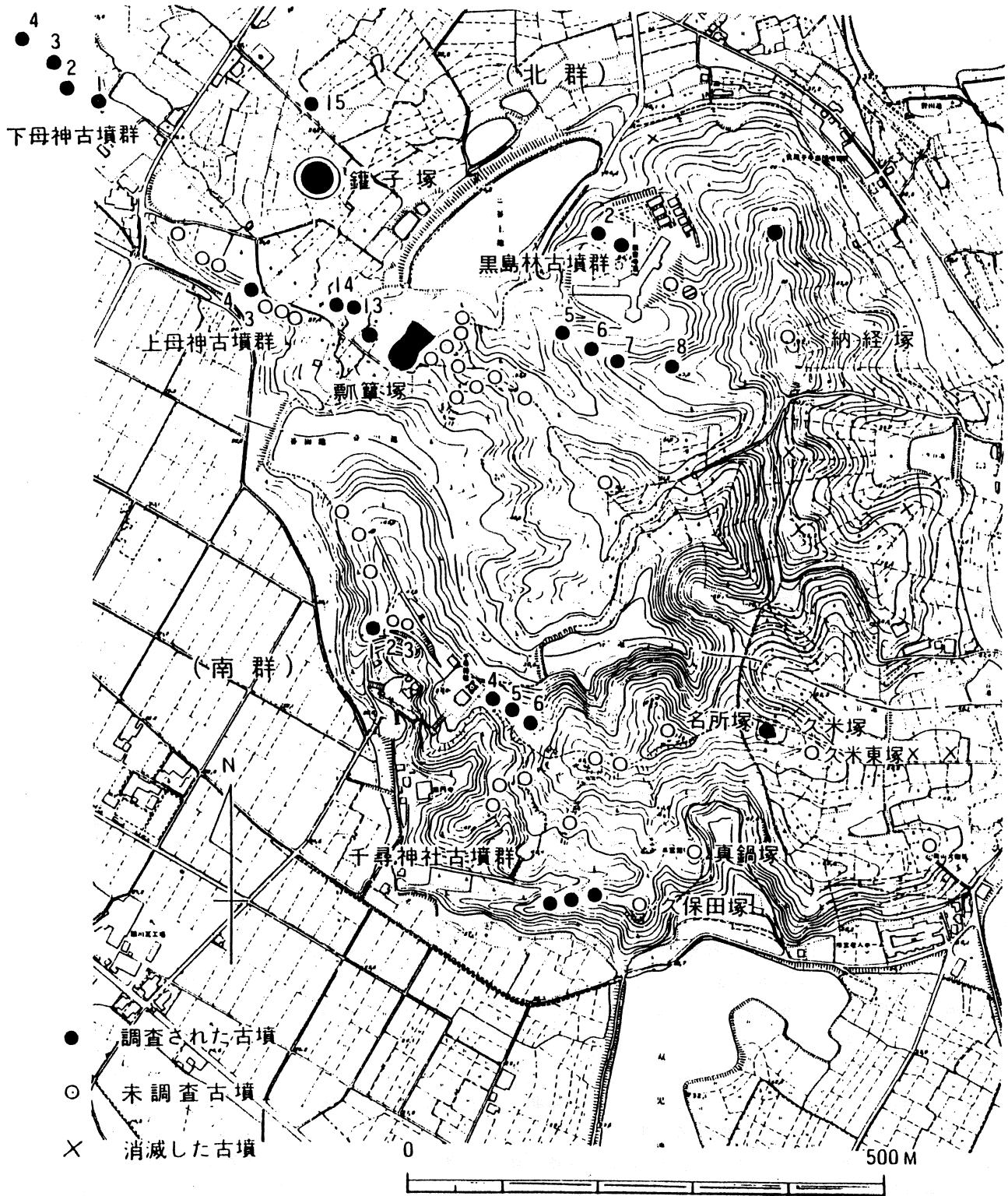
今回、市教委では、同古墳の残存状況や遺跡の保存と活用に関する詳細な資料を得るため発掘調査を実施した。

2. 立地と環境

久米塚の所在する母神山は、香川県観音寺市内にあり粟井町、池之尻町、木之郷町にまたがる位置に立地し、山全体が花崗岩より成り、周囲は約4kmある。また、同山は三豊平野（観音寺市・三豊郡）のほぼ中央部に位置し三豊平野全域と瀬戸内海を見渡すことができ、山の南北には柞田川と財田川が麓灘に向かい流れており、水利的にも恵まれた場所にある。現在は、山頂部がなくなっているが、記録では、標高約92m程度であり、山と名前は付いているが小高い丘陵地と言ったほうがよいかもしれない。

また、この母神山は6世紀代から7世紀にかけて県下でも屈指の古墳群が形成され母神山古墳群としてその存在が知られている。代表的なものに、前方後円墳に周溝を有するひさご塚古墳（6C前半）、単鳳環頭太刀柄頭や金銅製馬鈴が出土し複室構造を石室に待つ鐘子塚古墳（6C後半）、県下でも横穴式石室では古手の部類の千尋神社4号古墳（6C中葉）等がある。現在、確認されているものをあわせると計60数基（次頁の分布図参照）を数えるが、最近の調査によれば未確認のものが新たに2基発見されており、かつては70基を越えて存在していたと思われる。

母神山古墳群のある地域周辺は、後の律令体制下の讃岐国刈田郡紀伊郷の郷域に含まれる。郷内には延喜式内社の粟井神社（粟井町）、於（うへの）神社（粟井町）の二社があり、郡内にはその他のものをあわせると計6社（黒島神社、山田神社、高屋神社、加麻良神社）が存在する。また、郡名、郷名にも深い関わりが想定される紀朝臣刈田首安雄（日本三代実録一貞観9年）で代表される刈田氏に関連する伝承がある乳若屋敷（粟井町）があることや母神山の麓にゴンゲという地名も残されていることは非常に興味深い。恐らく、刈田氏の本拠が郷内に置かれていた可能性があると思われるが今後の慎重な検討、研究が必要課題である。また、紀伊郷に接する刈田郡柞田郷には南海道の柞田駅があり、刈田郡姫江郷内（大野原町）には巨石を使用した大野原古墳群（椀貸塚、岩倉塚、平塚、角塚等）がある。古代寺院には安井廃寺（紀伊廃寺・青岡大寺）があり白鳳期の瓦の出土例があることから注目される。これらの遺跡は古代の三豊平野の状況や母神山古墳群の被葬者達の人物像を考察する上で重要なポイントであると思われる。



母神山古墳群分布図 (観音寺市誌掲載分に一部訂正・修正を加えた。)

3. 調査概要

まず、墳丘上の雑木や下草等の除去・清掃作業を行い、その後、地形測量調査を行った。測量の結果、墳丘上には開墾時の影響ものと思われる石室の石材が散在しており、また、墳丘の南側には樹園地の管理道が墳丘の一部を貫いて通っていることが判明した。墳丘は、名所塚をその頂点としていったん東方向に延びた尾根が南東方向と北方向に延びる尾根に分岐するが、そのうち南東方向に延びた尾根上に立地している。前述の尾根の分岐点から久米塚に至る間は比較的傾斜があり原地形を残していると思われる。それから若干逆に盛り上がりがあり、その後は緩やかに下方に向かって傾斜している地形である。当古墳の墳丘上部は開墾によりかなり削平されてしまっていることが後段の参考資料（以下『参考資料』という。）のスケッチと比較すると明らかに判断が出来る。わずかながらの盛り上がりはそのなごりであると思われる。墳形については、北側が防風林と道路になっており測量が困難な状態であったが、後述のトレンチ調査の結果とも考え合わせて、円墳であると判断してよいのではないかと考えられる。

次に、石室の開口方向と墳丘規模及び墳丘・石室の築造状況の確認のためトレンチ調査を行った。参考資料には石室の開口方向は「・・此墳ハ南微東ナルベシ」とあるのでおおよその予測はできたのでトレンチを東西方向に設定した。トレンチ1とトレンチ2である。また、上方から延びてきた尾根と墳丘との間の状況の確認のためトレンチ3を設定した。

以下は、その簡単な概要である。

- トレンチ1
- ・石室の側壁の一部が確認され、石室の開口方向（S-32°-W）が判明した。
 - ・石室構築前の一次墳丘と石室構築中に盛られた土層並びに石室完成後に築かれたとみられる盛り土層を確認した。
 - ・他の母神山古墳群内の石室によくみられる石室を構築する際の版築土層が石材に接する工法を用いず、当古墳は意識的と思われるほど母神山特有の赤褐色の粘質土を用いていることが特徴的である。
- トレンチ2
- ・トレンチ全体の上層は、攪乱をかなり受けた様子があり明確な築造当時の版築土層は確認が困難な状況であった。
 - ・周溝についてであるが、これも攪乱の影響のためか、地山層にわずかに落ち込みが見られる程度であった。
- トレンチ3
- ・尾根の分岐点から下がってくる尾根と墳丘との間に周溝の存在が確認された。
 - ・周溝にはかなりの土砂が堆積しており、開墾前にはもう少し境界が明確であったと思われる。

次は石室についてであるが、トレンチ1を延長・拡張し、まず、石室全体の平面プランと天井石の残存状況等を確認する作業に移った。その結果、残念ながら、天井石は玄門立柱上部の一石のみ残存するだけであり、また、側壁上部の石材についても内側に倒れ込んだ状態が検出され、その上、石室内部には大量の土砂が堆積している状況であった。この石室内部に堆積している土砂を搬出する過程においても、埋土中に比較的小型の石材が多く混入している状態でもあった。ほぼ石室内の堆積土砂の搬出作業が終わる頃には床面に敷かれてある小円礫を確認した。以後、慎重に床面の検出作業を開始し、石室全体の遺構検出作業を終了した。

以下は、その簡単な概要と特徴である。

- 墓道部
- ・石室の閉塞は、床面に大小2個の石材を石室主軸線に直交した形で配置し、それを外側から包むように暗赤色の粘土で覆い、その上層には5石の石材をやや外側よりのところで石室主軸線に沿った形に配置し閉塞を行っている。墓道全体には、赤褐色系、黄褐色系、灰白色系の粘質土を用い複雑に層をなして充填し同様に閉塞の構造となっている。残念ながらこれより上層の構造は攪乱により明確に検出できなかった。なお、墓道の幅は、閉塞石付近で上部が約88cm、下部が約68cmあり、外側に向かって一旦やや開きながら延びるが、排水施設の終わる付近よりまた狭くなって

いくような構造を持つ、がその外側については攪乱のため確認ができなかった。また、両方の壁は垂直に近い角度でやや上方に開きながら立ち上がる状況が明確に確認できた。

羨道部

- ・床面には中央部付近に二列の仕切石のようなもの（以下本書では便宜的に羨道内仕切石という。）が見られ、それを境界として玄門石側には小円礫が敷き詰められている。なお、この羨道内仕切石は床面あるいは側壁などに固定されておらず、単に床面に据え付けられた簡易な構造のものであった。また、排水施設も付設されており、それが閉塞石の下側を通り墓道の途中（閉塞石から約140cm）まで延びている。
- ・側壁は、（玄室奥壁を背にして）左側側壁はほぼ垂直に立ち上がり、右側側壁は下段においてはほぼ垂直に、天井石に近づくにしたがって内側に傾斜している。
- ・床面の幅については、閉塞石付近で96cm、仕切石付近で102cm、玄門石の手前で88cmとわずかながら胴張り状の構造をとっている。

玄門部

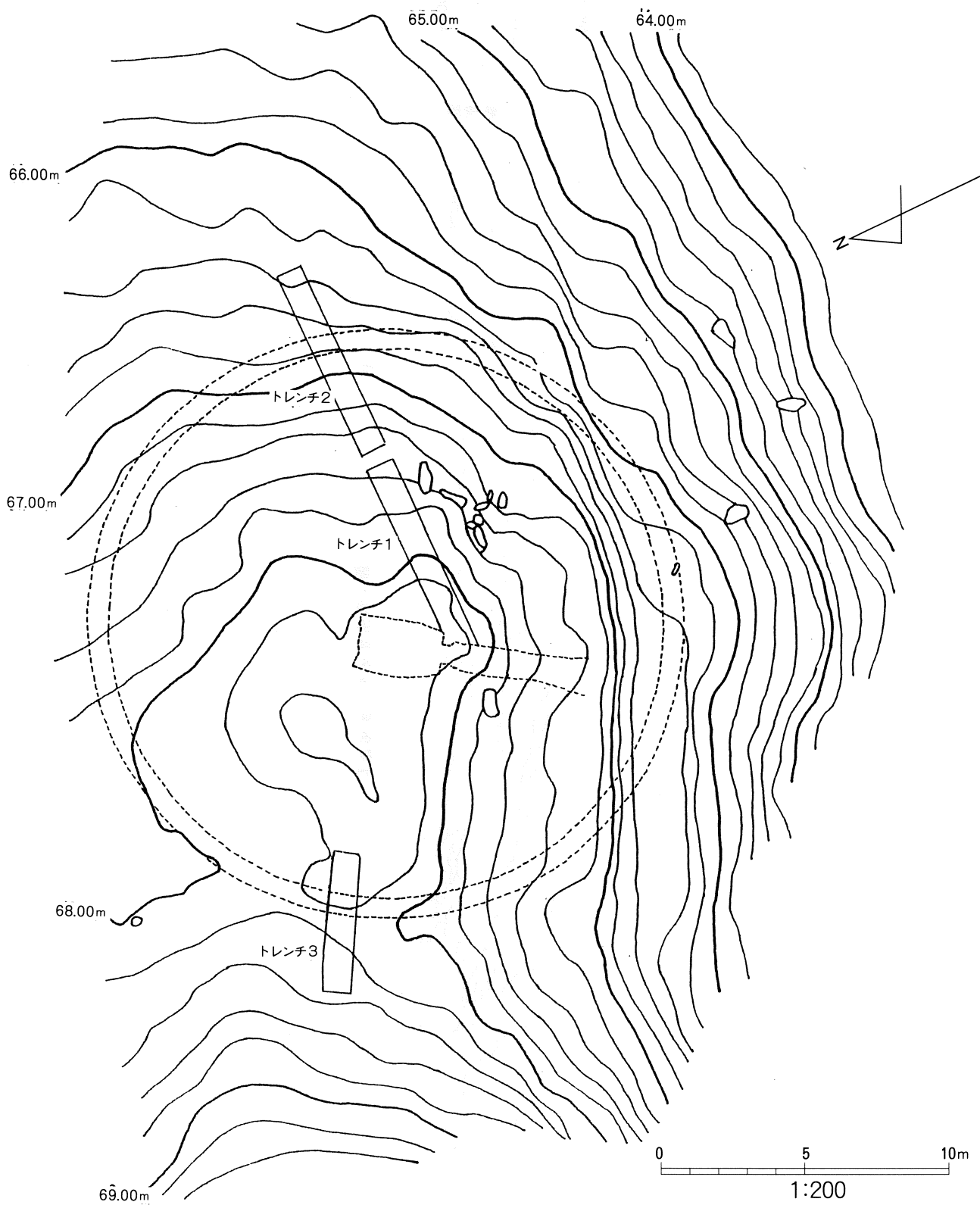
- ・玄門立柱は左右とも天井石まで一石で構成され、内側に両側とも10数cm程度突出しており、わずかながらそれ自体も内側に傾斜している。玄門の床面でもっとも幅の狭いところは約62cmである。石材については、（玄室奥壁を背して）左側は角のとれた川原石を使用し、右側は割石を使用している。
- ・仕切石は、おもに細長い川原石を3石横に並べて使用しているが、もっとも玄室よりのものは少し短く不足分を20cm程度の石で補っている。

玄室部

- ・床面には、全体に径4cm前後の小円礫が、特に中央部から奥壁にかけての部分に敷き詰められている。奥壁の左隅の角付近には、荻田氏の調査時に掘られたのであろうか、円礫の堆積はごくわずかなものであった。確認のため、円礫を取り除いたところ部分的ではあるが敷石状の遺構が確認された。そのうち一石ではあるが確実に側壁を置く前に敷かれたものと思われるものがあり、本古墳の石室構築過程を考察するうえできわめて興味深い。また、この敷石状の遺構がどのような役割を持っていたかについては今後充分検討する必要がある。
- ・平面プランについては、玄門付近で126cm、玄室中央部で194cm、奥壁で180cmであり、玄門部が極端に狭くなっており胴張りが著しい構造になっている。同古墳群の黒島林6号墳は胴張りの石室を持ち規模的によく似ているがこれほど顕著でない。
- ・側壁については、奥壁図のとおり両側壁とも持ち送り構造となっているが、特に羨道と同じく右側が開壜時の影響が多少あるかもしれないが顕著である。また、奥壁の両隅の角が床面では、ほぼ方形なのだが上方にいくにしたがって角の部分丸みをおびてくるようになり、天井石近くではドーム状に近い構造になっていたのではないと思われる。なお、天井石の位置であるが、玄門を境に側壁が羨道と比べて一段と高くなっているのがわかる。

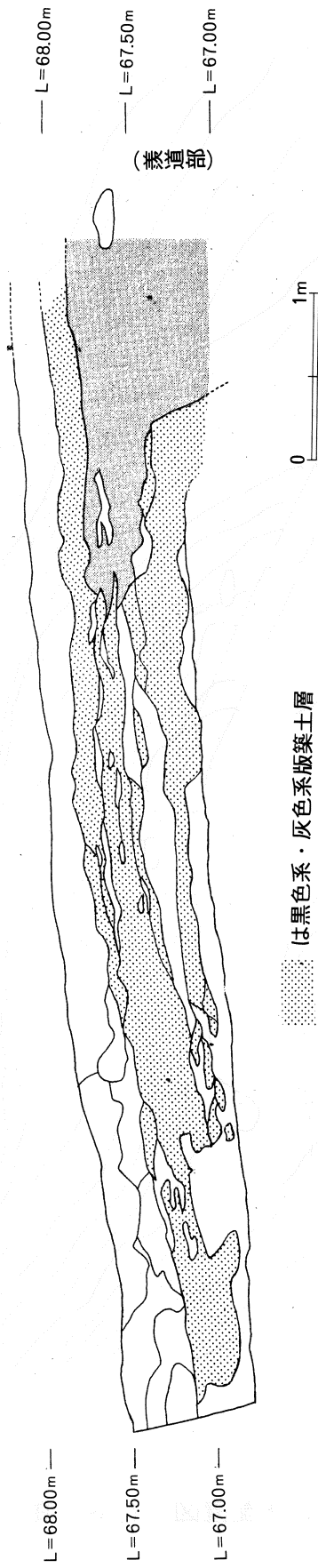
出土遺物

- ・今回の調査では、須恵器片と鉄器、玉類等が出土したが、量的には少なくコンテナ一箱におさまる程度であった。（遺物実測図18番・写真14番、15番参照）なお、鉄器については、馬具の兵庫鎖と思われるものが羨道より出土している。玉類については、ガラス小玉1点、管玉1点のみの出土であった。また、そのほかに昭和30年代の開壜時に墳丘内より出土したのものがあり、（明治38年の発掘時に出土したものを再度埋め戻していたらしい。）その一部ではあるが遺物実測図・写真16番以下に掲載しているので参照されたい。そのなかでも、詳細な出土状況は不明であるが、写真3の貝が5点蓋杯に入った状態で出土しているのが注目される。
- ・なお、鎌田共済会郷土博物館には明治38年当時に出土した遺物（太刀、鐔、耳環、高杯、轡等）が収蔵・展示されている。

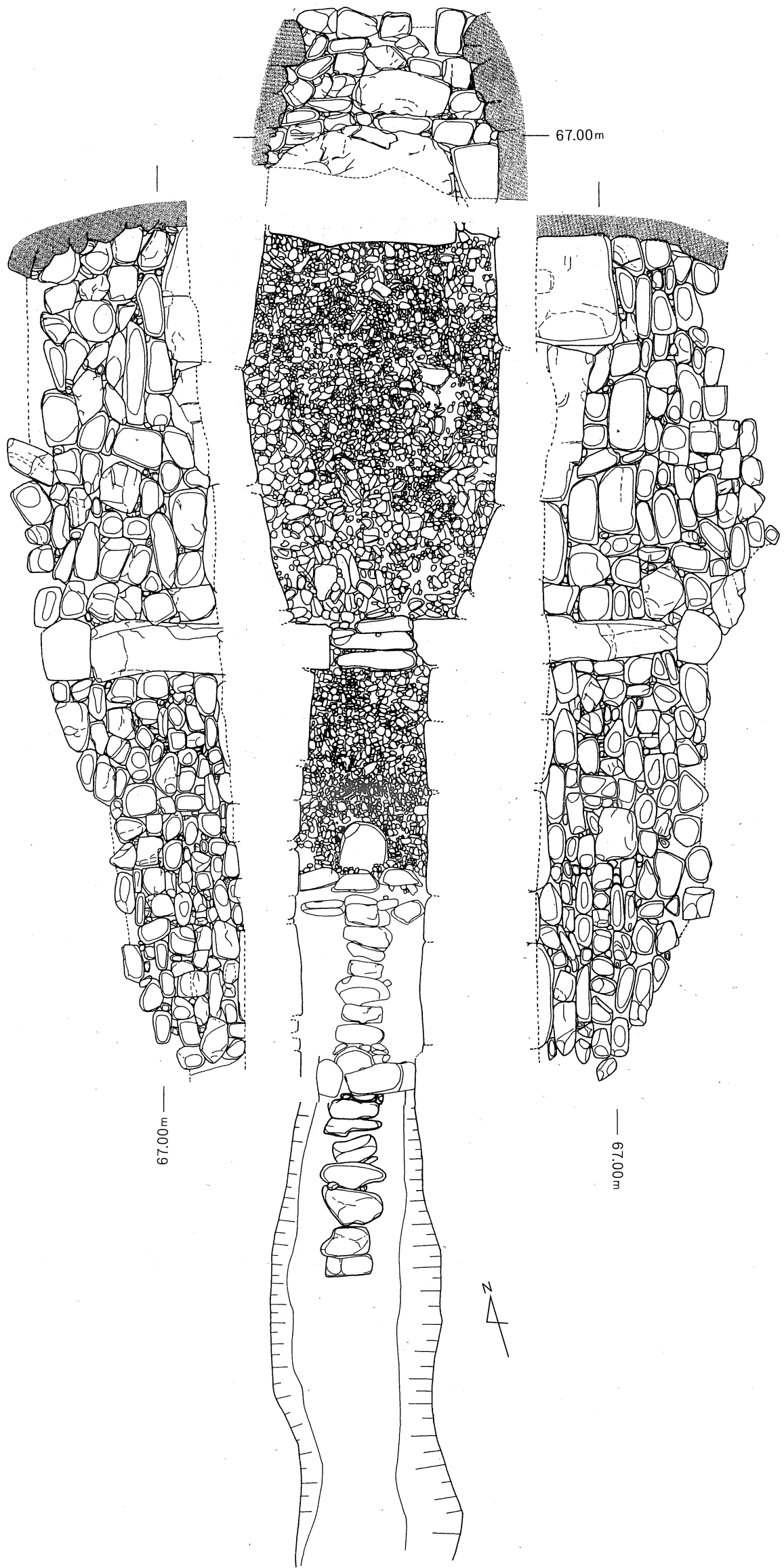


久米塚古墳地形測量図・トレンチ配置図 (石室と墳丘推定範囲は点線で示した。)

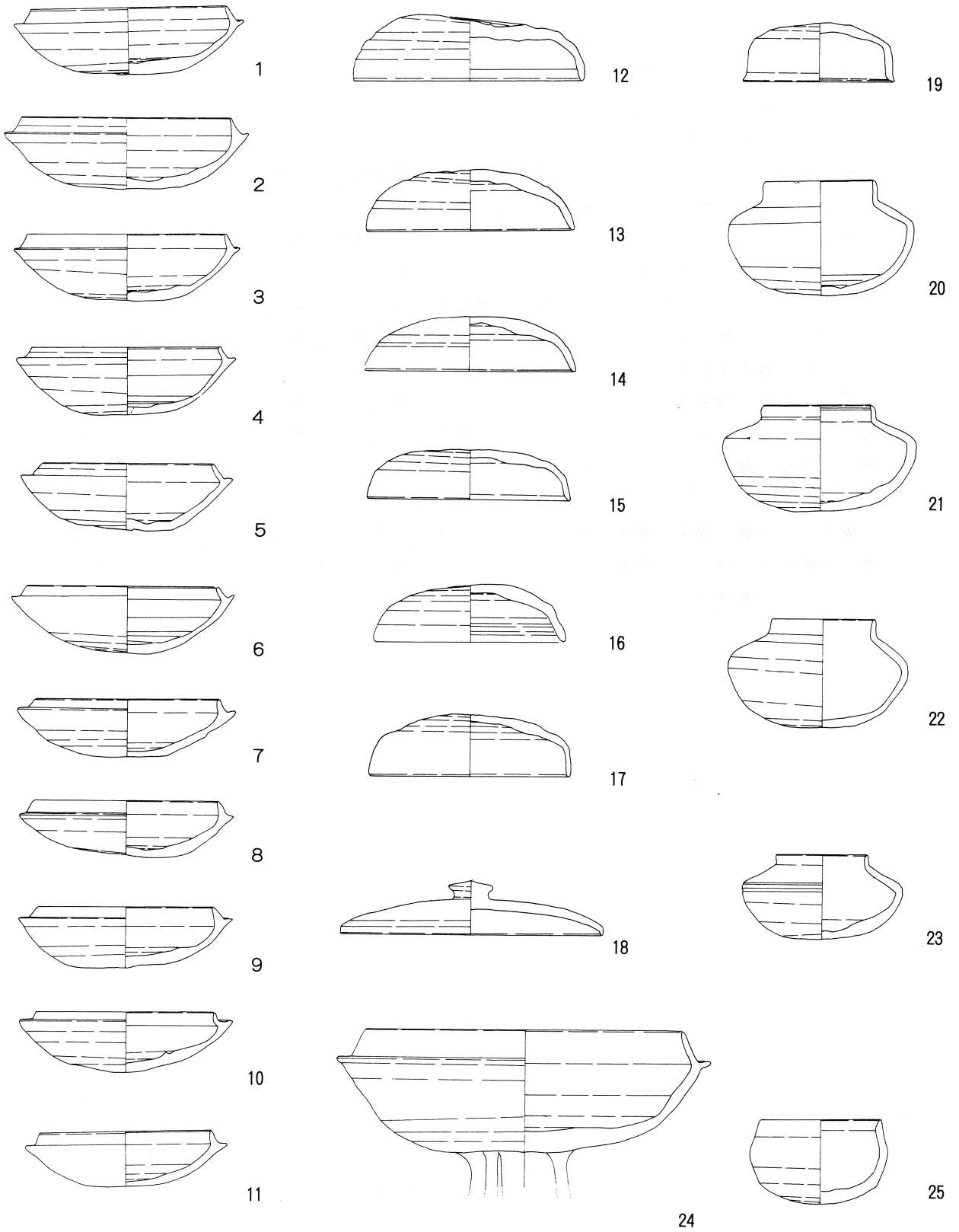
トレンチ1土層断面略図



久米塚古墳 石室全体実測図



出土遺物実測図



0 20cm 1:4

4. まとめ

明治38年の荻田氏による発掘調査以来91年ぶりの調査であったが、今回の調査において、母神山古墳群の中での久米塚古墳の位置付けと今後の当古墳の保存と活用を考える上で貴重な資料が得られたことは意義深いものがある。

以下にその特徴を簡単にまとめてみる。

墳丘規模は直径約21m、墳形は円墳と考えられ、埋葬施設には横穴式石室を基本構造に持ち、築造年代はその出土遺物により6世紀後半頃の時期と推定される。中でも、特徴的であるのはその石室構造にある。玄門部の玄門立柱が石室内部に突出しており、羨道の羨道内仕切石により区切られた玄門側半分の床面の構造は複室構造の前室を連想させる形態をとっている。

玄室部においては、平面形が顕著な胴張り構造を呈すること、床面に部分的ではあるが敷石状の遺構がみられたこと等があげられる。また、今回、石室の閉塞状況及び一部であるが墓道の状況等も確認され石室の構築過程を考察する上での資料を得られたこともその成果である。

なお、今後の課題としては、古墳の築造過程の問題や、出土遺物の詳細な検討により追葬の時期に関することなどがあげられる。また、母神山古墳群やその周辺の他の遺跡との関係を比較検討すること、特に、石室の構造については重要な課題である。

最後に、本書は調査の概要を簡単にまとめたものであるので、本書掲載以外の遺構、遺物の実測図等は省略させて頂いた。詳細な内容については、今後、充分検討・研究を経た上での報告を考えているので、ご了解頂きたい。

5. 写 真

目 次

1. 母神山遠景（藤目山より）
2. 調査着手前の墳丘の状況
3. 石室内部の状況（閉塞石付近より）
4. 羨道部の状況
5. 玄室奥壁付近の状況
6. 玄門部の状況（玄室奥壁側より）
7. 玄室床面の状況
8. 玄室床面の敷石の状況
9. 玄室床面の状況
10. 羨道部と石室の閉塞状況
11. トレンチ1
12. トレンチ2
13. トレンチ3
14. 遺物出土状況（鉄器）
15. 出土遺物（ガラス小玉、管玉）
16. 出土遺物－昭和30年代出土①－
17. 出土遺物－昭和30年代出土②－
18. 出土遺物－昭和30年代出土③－



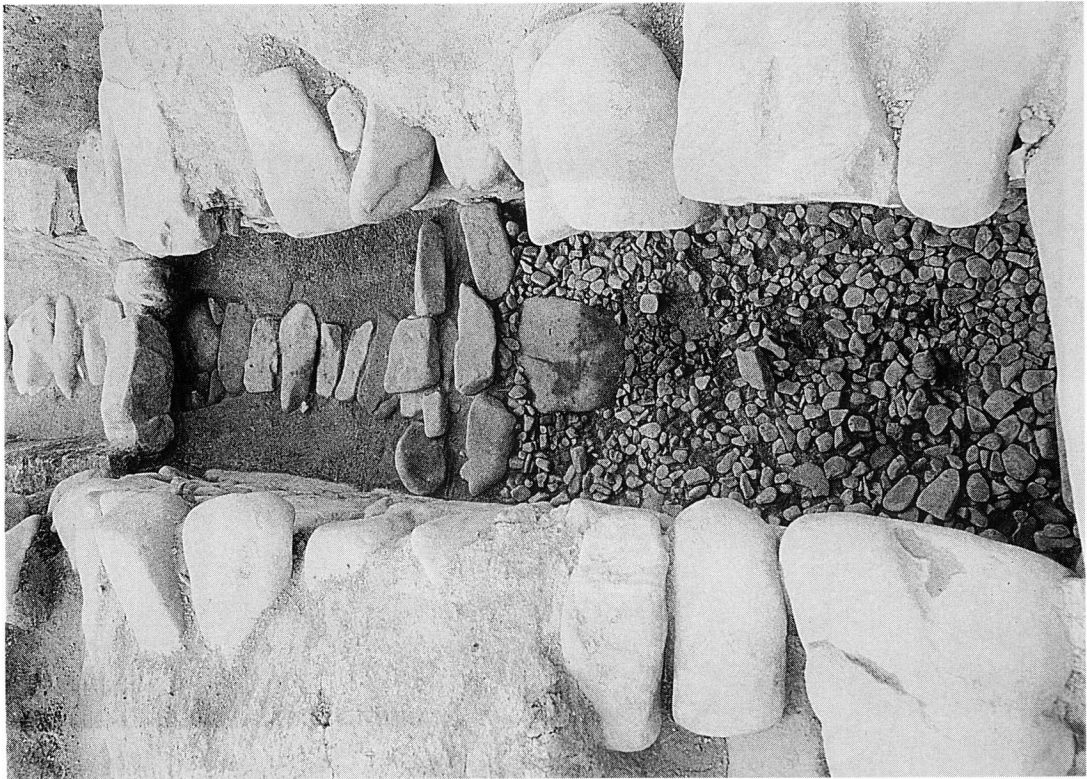
1. 母神山遠景（藤目山より）



2. 調査着手前の墳丘の状況



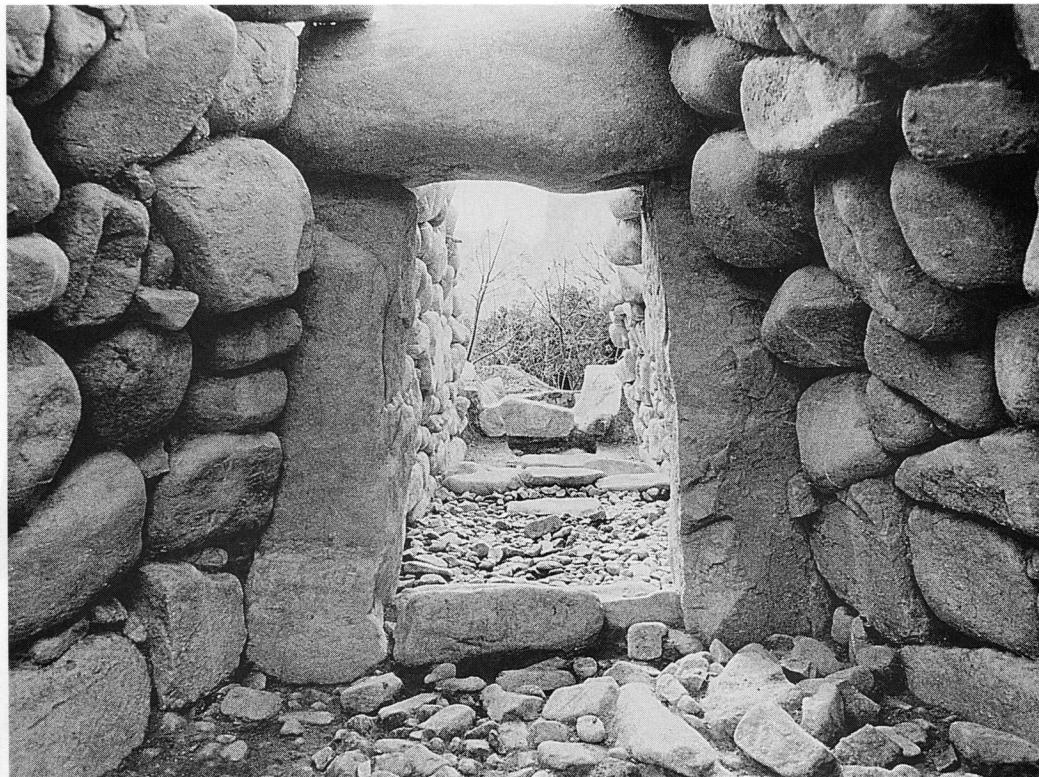
3. 石室内部の状況（閉塞石付近から）



4. 羨道部の状況



5. 玄室奥壁付近の状況



6. 玄門部の状況 (奥壁側より)



7. 玄室床面の状況



8. 玄室床面の敷石の状況



9. 玄室床面の状況



10. 羨道部と石室の閉塞状況

(器埴) 灰丸



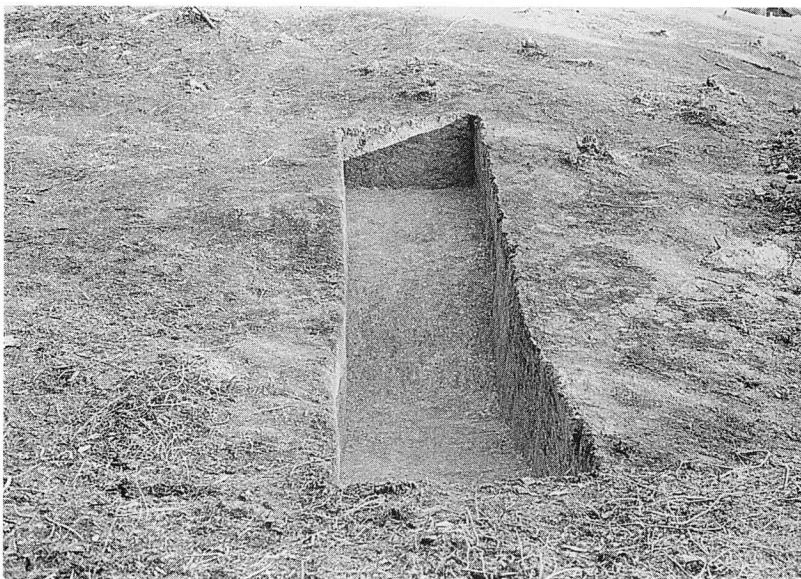
11. トレンチ1

(玉管, 玉小)



12. トレンチ2

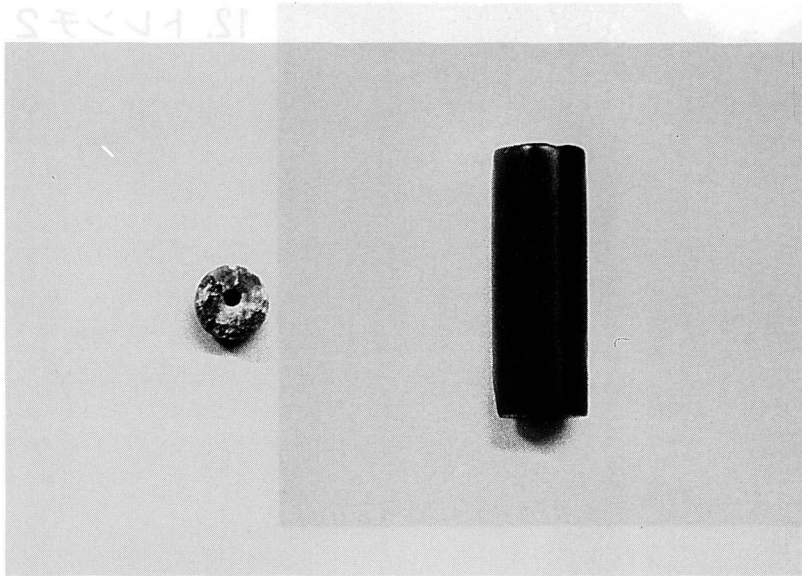
①-土



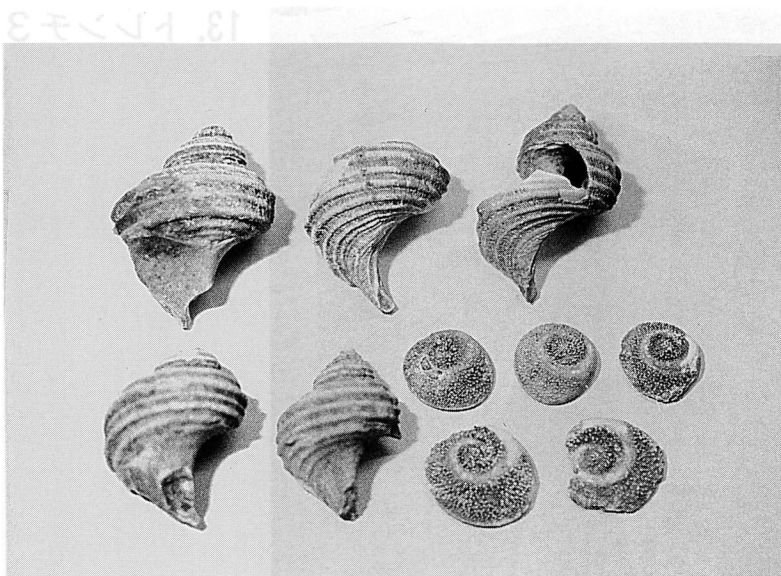
13. トレンチ3



14. 遺物出土状況 (鉄器)



15. 出土遺物
(ガラス小玉、管玉)

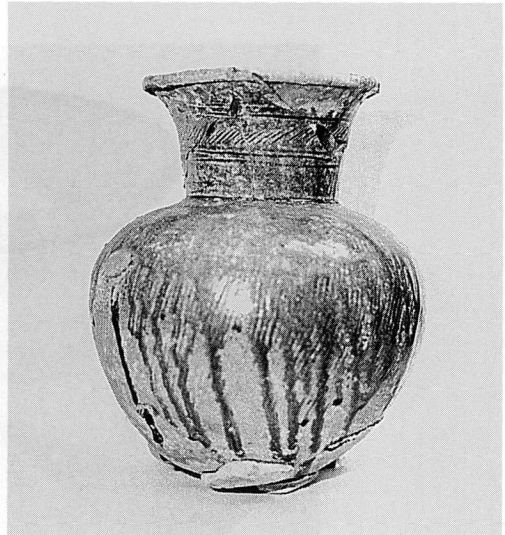


16. 出土遺物
—昭和30年代出土—①

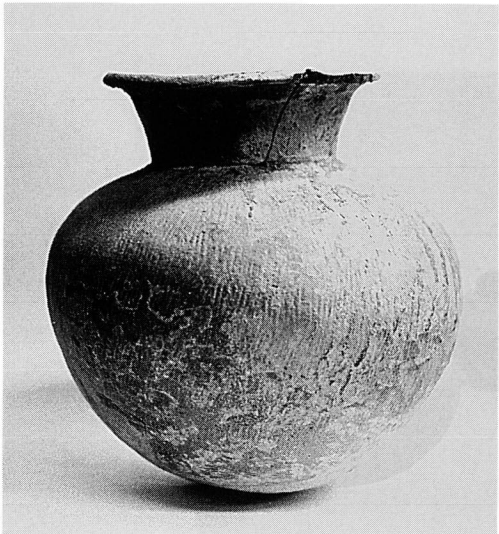
17. 出土遺物—昭和30年代出土—②



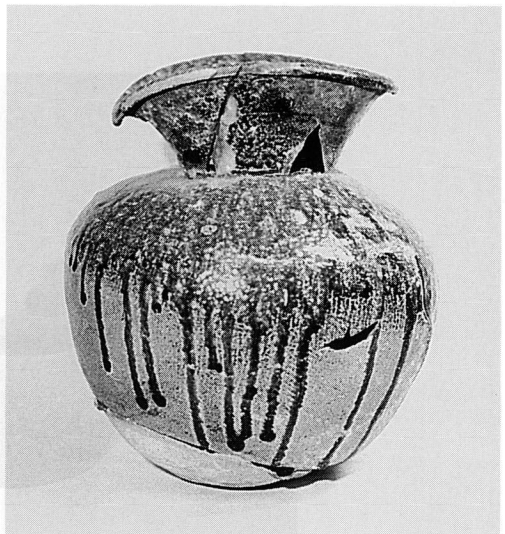
1



2



3



4



5



6

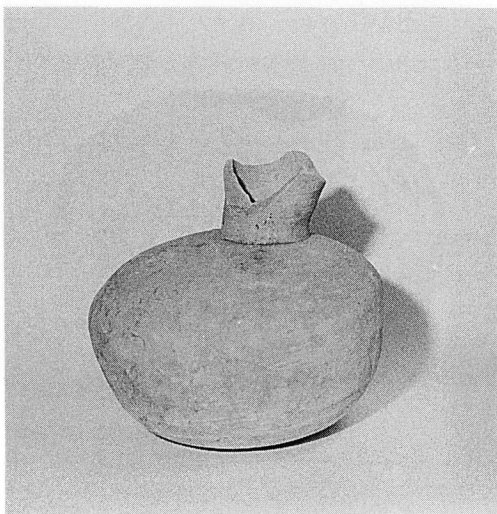
18. 出土遺物一昭和30年代出土一③



7



8



9



10

参考資料

この参考資料は、香川県坂出市の財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵の『讃岐史料雑之一』（荻田元広氏著）の久米塚に関係する部分を許可を得て本書に転載したものである。同書には明治38年1月当時の久米塚古墳調査に至るまでの経過や略測図・スケッチ等が記載されており、本古墳の性格を理解するための参考になれば幸いである。

【資料1】 上段は、西讃三豊郡粟井村母神山久米塚（仮称）発掘の段の原文である。

下段は、原文の読み下しである。（不明な部分は■とした。）

【資料2】 久米塚付近のその他の古墳との位置関係をあらわしている絵図である。

「今掘りタル塚」が久米塚であると思われる。

【資料3】 上段は、「開掘以前ノ状」：発掘前の状況である。

下段は、「開掘後羨道ヲ開キタル状」：発掘後の状況である。

【資料4-1・2】 出土遺物の種類とそのスケッチである。

【資料5】 櫛内遺物分布図：玄室内の遺物分布と石室の規模が記載されている。

【資料6】 床の断面、天井石配列図：天井石は羨道で7石、玄室で6石あるのがわかる。

西讃三豊郡粟井村母神山久米塚(仮稱)発掘

前者既ニ終レハ日亦傾キ又然レトモ氏此塚ノ高大ナル確ニ明一日ノ大丁場タルヤ必セリ依テ少シク之ヲ助ケンカ為ニ此ニカ、リ又技師タル余ハ左右目測ヲ以テ石槨ノ口向ト頂ヨリ掘リ下グベキ長ケトヲ諸輩ニ指示セリ蓋シ此大古墳ハ一タビ其測定ヲ過マラバ到底一日ノ事業タル可カラサルナリ況ンヤ三四年前某氏カ之ヲ発掘セントシテ六七人ノ人夫ヲ以テ遂ニ石槨ノ石ノ面ヲモ見スシテ絶望中止シタル處ナレバナリ余ノ測定ハ左ノ如クナリキ

- 一 石槨口ハ南向ハ勿論ナレトモ此墳ハ南微東ナルベシ
- 一 石槨天井石ヲ見ルハ頂ヨリ六尺ニシテ達スベシ

ト予想ハ既ニ此ノ如シ只此地々質甚堅硬殆ント古代ノ盛リ土タルヲ疑フ者アルカ程ナリキ再ヒ総係リトナリテ作業ハ始マレリ

此少頃刻間ノ苦働辛勞ハ実ニ旅順土坑作業ヲ目前ニ現セシモノナリキ日ハ落チヌ而シテ手ハ少頃モ息メサルナリ暮靄ハ漠トシテ遠ク燧洋ヲ蔽ヒ又華鯨嶺ヲ掠メテ来リ平蕪人無ク聚落巴ニ燭光アリ而シテ石槨ノ天井石遂ニ余輩ノ目下ニ現ハレ出テシナリ

幅二寸ハカリ長一尺程ノ天井石ト天井石トノ間隙ハ槨内ヲ望ミ入ルベク多数觀者混雜ノ集合點トナリ又彼去リ此代リテ一瞰亦一瞰遂ニ何時ハツヘクモノナシ余ハ徐ニ懷中尺ヲ二メートルノ長サニ伸ハシテ之ヲ下シ又唯見ル大小土墳床ニ正シク達セリ次ニ蠟燭ヲ手鋏ノ上ニ立テ之ヲ下シ又唯見ル大小土器右往左往ニ散乱シ長刀ノ静カニ横ハルヲ見タリ即チ命シテ此間隙ヲ閉ヂ土石ノ槨内ニ落下スルヲ防キ窓口ヲ開クニ着手セリ

西讃三豊郡粟井村母神山久米塚(仮稱)発掘

前者既ニ終レハ日亦傾キ又然レトモ氏此塚ノ高大ナル確ニ明一日ノ大丁場タルヤ必セリ依テ少シク之ヲ助ケンカ為ニ此ニカ、リ又技師タル余ハ左右目測ヲ以テ石槨ノ口向ト頂ヨリ掘リ下グベキ長ケトヲ諸輩ニ指示セリ蓋シ此大古墳ハ一タビ其測定ヲ過マラバ到底一日ノ事業タル可カラサルナリ況ンヤ三四年前某氏カ之ヲ発掘セントシテ六七人ノ人夫ヲ以テ遂ニ石槨ノ石ノ面ヲモ見スシテ絶望中止シタル處ナレバナリ余ノ測定ハ左ノ如クナリキ

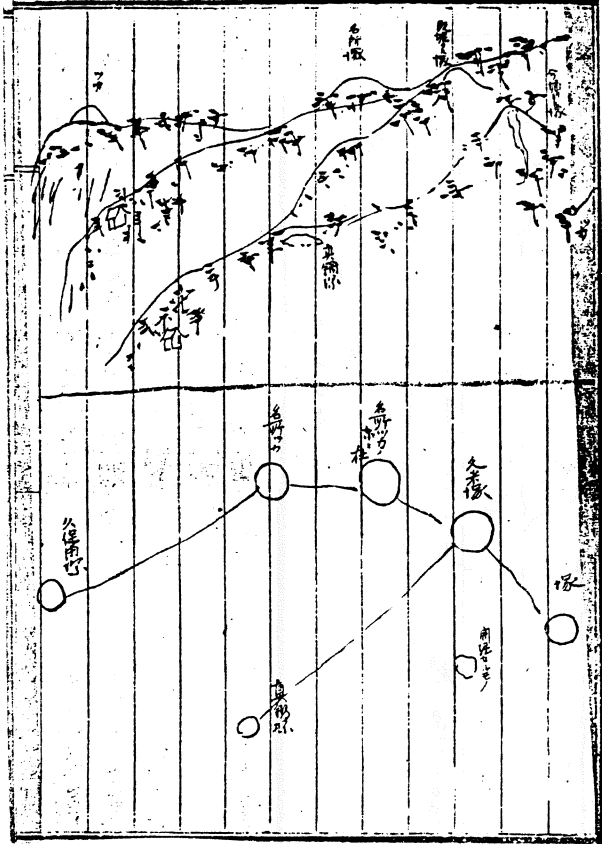
- 一 石槨口ハ南向ハ勿論ナレトモ此墳ハ南微東ナルベシ
- 一 石槨天井石ヲ見ルハ頂ヨリ六尺ニシテ達スベシ

ト予想ハ既ニ此ノ如シ只此地々質甚堅硬殆ント古代ノ盛リ土タルヲ疑フ者アルカ程ナリキ再ヒ総係リトナリテ作業ハ始マレリ

此少頃刻間ノ苦働辛勞ハ実ニ旅順土坑作業ヲ目前ニ現セシモノナリキ日ハ落チヌ而シテ手ハ少頃モ息メサルナリ暮靄ハ漠トシテ遠ク燧洋ヲ蔽ヒ又華鯨嶺ヲ掠メテ来リ平蕪人無ク聚落巴ニ燭光アリ而シテ石槨ノ天井石遂ニ余輩ノ目下ニ現ハレ出テシナリ

幅二寸ハカリ長一尺程ノ天井石ト天井石トノ間隙ハ槨内ヲ望ミ入ルベク多数觀者混雜ノ集合點トナリ又彼去リ此代リテ一瞰亦一瞰遂ニ何時ハツヘクモノナシ余ハ徐ニ懷中尺ヲ二メートルノ長サニ伸ハシテ之ヲ下シ又唯見ル大小土墳床ニ正シク達セリ次ニ蠟燭ヲ手鋏ノ上ニ立テ之ヲ下シ又唯見ル大小土器右往左往ニ散乱シ長刀ノ静カニ横ハルヲ見タリ即チ命シテ此間隙ヲ閉ヂ土石ノ槨内ニ落下スルヲ防キ窓口ヲ開クニ着手セリ

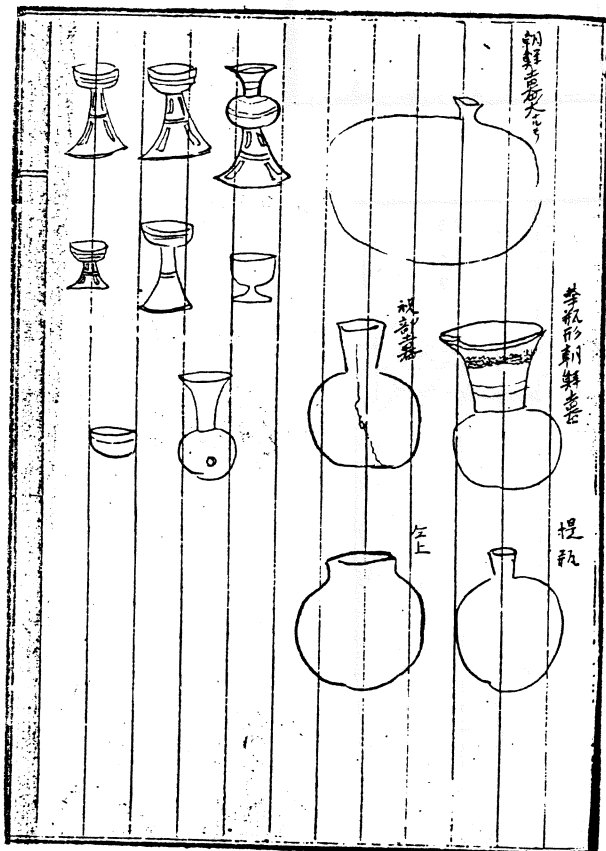
[資料2]



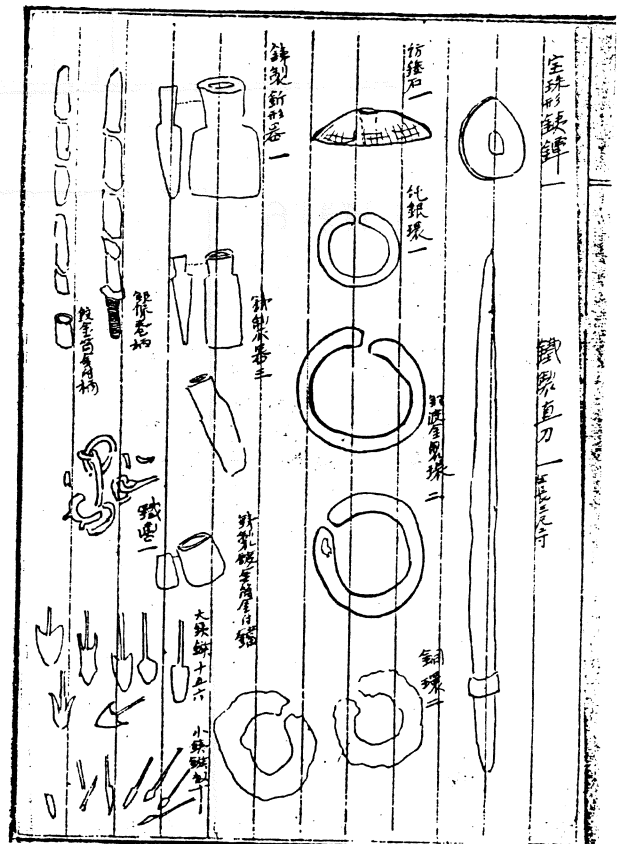
[資料3]



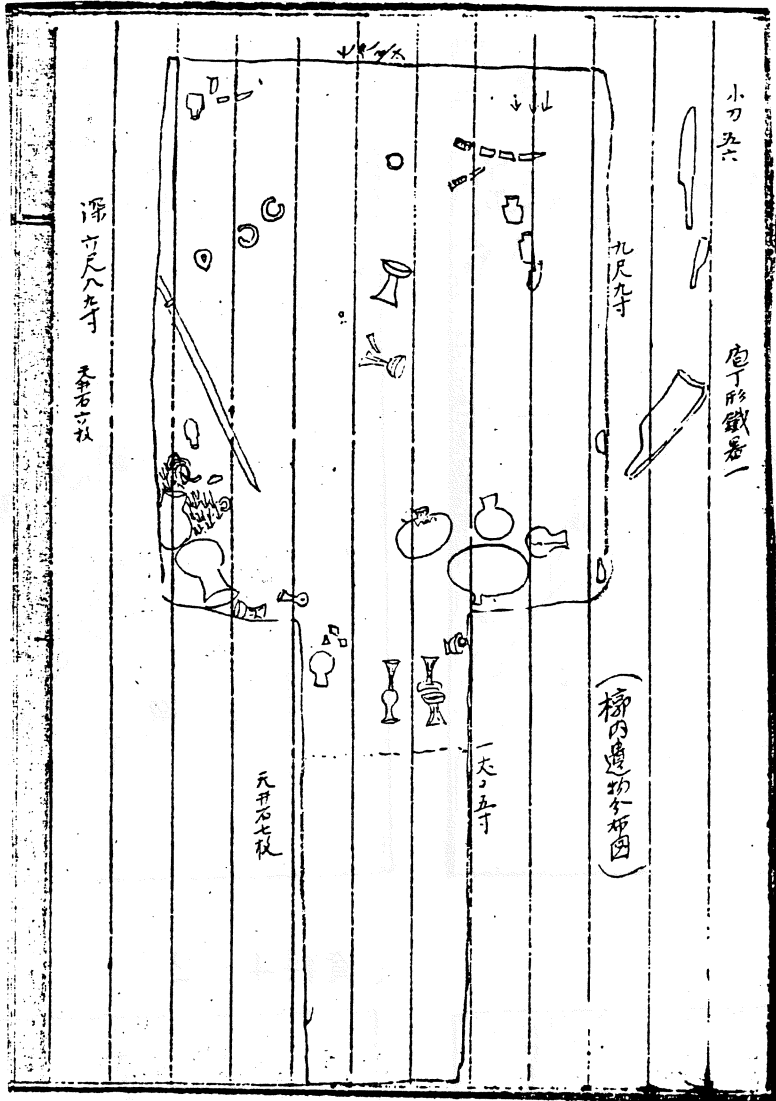
[資料4-1]



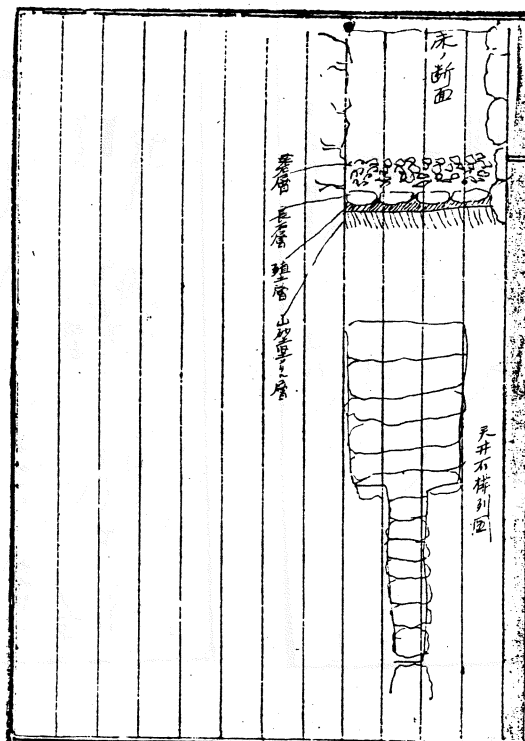
[資料4-2]



[資料5]



[資料6]



[参考・引用文献]

- (1) 香川県『香川県史1 原始・古代』1988
- (2) 観音寺市『観音寺市誌(通史編)』1985
- (3) 瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第6号』1991
- (4) 香川県三豊郡役所『三豊郡史』1921・・・(株)名著出版1973復刻
- (5) 『讃岐史料雑之一』(財)鎌田共済会郷土博物館所蔵
- (6) 黒島林古墳群発掘調査団『黒島林第5・6号墳調査報告』1977
- (7) 観音寺市教育委員会『母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号古墳』1973
- (8) 大野原町教育委員会『角塚』1995
- (9) 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図 香川県』1977
- (10) (財)鎌田共済会郷土博物館『資料目録』1986増訂再版

報告書抄録

ふりがな	くめづかこふんはつくつちょうさがいようほうこくしょ						
書名	久米塚古墳発掘調査概要報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	久保田昇三						
編集機関	観音寺市教育委員会						
所在地	〒768 香川県観音寺市観音寺町甲334番地1					TEL 0875-23-3943	
発行年月日	西暦 1996年 3月 29日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド	北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
くめづかこふん 久米塚古墳	かがわけんかんおんじし 香川県観音寺市 あわいちょうあざはがみ 粟井町字母神	37205	34度 6分 2秒	133度 41分 43秒	19951023~ 19960202	62	観音寺市 埋蔵文化 財調査事 業
所収遺跡名	種	別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
久米塚古墳	古	墳	古	墳	1基 須恵器 ガラス玉 管玉 紡錘車 耳環 鉄器 (太刀、轡、鉄鍬等) 巻貝	60数基からなる母神 山古墳群の中の1基	

久米塚古墳

発掘調査概要報告書

平成7年度

1996(平成8)年3月29日発行

編集・発行 観音寺市教育委員会

香川県観音寺市観音寺町甲334番地1

電話 (0875) 23-3943

FAX (0875) 23-3925

印刷 株式会社 三 和